
singing in the rain

小林 修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

singing in the rain

【Nコード】

N1553W

【作者名】

小林 修

【あらすじ】

ある雨の夜、少年は少女に出会う――

誰かが僕の価値を測ろうとしてあれこれ僕と誰かを比較しようとすることは、当たり前のことであって、それについて『弱い』とか『逃げだ』とか非難されることが多い世の中だけど、結局のところ、自分の価値を高める行為もまた必然的に、他者を蹴落とす行為に他ならないので、自分の価値はやっぱり、他人の価値に委ねられるのだ。

他人ってなんだろうかと真面目に考えると僕以外の誰かについてになるだろうけど、それは正鵠を射てて、間違いなのである。

やっぱり、自分が存在することは、自分しか分からないという認識がはびこる世の中だが、他人があつてこそその僕であり、世界なので、このときの他人は、僕以外の誰かではなく、突き詰めることの、僕自身が、他人なのだろう。

それでいて、僕の価値は、『普通』なのだろう。

僕は『普通』に生活をしている。別に海賊王になるわけではない、この世界でありふれた生活をしている。

でも、ここで言う『普通』ってそのものも、誰かが『普通ではない』境遇であるからこそ生まれる認識であって、僕自身が『普通』であるはずがないのだ。

そう考えると、僕の価値は唯一だし、誰にもあることではないのだ。

誰かにとつての特別が、誰かにとつての普通なのだ。

でも、僕は、誰かにとつての『普通』であるようだ。

だから、こうして、とりわけ目的もなく夜中に起きることなんてまずなかったのだ。

街は、大雨に見舞われた。

梅雨でもなく、降る雨はどこか、季節外れのような印象を受け

て、なんだか特別な気さえした。

一日中、空を覆っていた曇天の空もようやくあけたときにはもう街は死んでいるも同然のように冷たく、黒かった。

深夜三時。だろうか。

道には、もう人影などなく、ただ等間隔にある街灯の青白い光だけが、その暗闇に抵抗していた。

雨が、止んでいることを確認した僕は薄着に着替え、散歩することにした。

目的なんて何もなかった。

ただ、強烈な覚醒が、僕を襲って眠れなくさせたのだ。

せつかくだし、散歩でもしようかと僕の中で浮かんたのだ。

家の玄関を出た途端、雨の匂いが僕の鼻孔を突きさした。

何か、予感はした。

こんな、時間なのに誰か会ってしまいそうな予感。

ただ、意味もなく歩いていく。

この街を見下ろせる、大きな高台の坂道の下まで来た。

普段なら、上がるはずもないその高台に、神秘的な魅力を感じたのは、こんな夜遅くに散歩することなんて今までなかったからだろう。

そして、街を、見下ろす。

やっぱり、いたー。

誰もいるはずのない、高台に、神秘的な雰囲気纏わして、そこに誰かが立っていたのだ。

だから思わず声をかけてしまった。

「やあー」

すると、向こうも、偶然的な出会いであるが、まるでこちらの来訪を予期していたように笑顔で振り向いた。

「やあー」

おそらく、少女だろう。

その笑みは、どこか懐かしく見えたのだ。

「やあ―」

その少女は、月明かりに照らされて、無機質的な会話にも関わらず、どこか妖艶な美しさを出していた。

僕が、たまたま散歩したことによって出会った偶然なのに、初めて知り合ったような感覚は不思議としなかった。

いや、むしろ昨日まで隣にいたような感覚さえ感じられるのだ。
郷愁。

多分、この表現が正しいと思う。

僕はこの、名前も知らない少女にどこか惹かれているかもしれない。

「こんにちは」

そう、僕はあいさつした。時刻は夜中の三時。こんにちはとは、まるで見当違いだと思うが、何か言わなければならぬという僕の思考がとっさに、その言葉を発したのだ。

「ええ―。こんばんは」

につこりとほほ笑んだ。

まるで、少女、いや、その笑みはどこか含みを持ちつつも、完璧な微笑みらしく、憂いをも含んでいた。

僕は、尋ねた。

「こんな遅くにどうしたんですか」

「散歩よ。あなたと同じ」

そう言つて、少女はまた僕に細く―微笑んだ。

どうして散歩だと分かったのだろう。と問いかけた。

すると、少女はくすくすと笑い、こう答えた。

きまっているじゃない。こんな夜遅くに散歩以外することないもの。

なるほど。と僕は頷いた。

「じゃあ君は、いつも散歩してるの？」

「ええ―たまにね。寝れない夜とかにね」

内緒よ。と口に人差し指を当てしーの文字を作った。

その姿は、今まで、少女らしからぬ雰囲気を纏っていた彼女の唯一、少女らしい姿だった。

「へえー。こんな夜中にも散歩なんてする人がいるんだ」

「ええ、わたしは好きよ。誰もいない街とか」

確かに、誰もいない街を歩くのは少なからず、自分がこの街を支配した気分になって若干だが気持ちよかった。

それから、僕らは話すこともなく暫し、沈黙した。

誰もいない街。

見下ろす。

耳を澄ませば。

雨上がりの匂いと。

滴る滴の音。

まるで幻想。

それが心地よくて。

僕はいつまでも、そうしていたい気分だった。

不意に、沈黙を破る声。

「ねえー」

僕の世界は、その幻想から再び、目の前の少女に戻った。

「あなたは、幸せー？」

その問いかけは、僕に向けたものだろうか。

それとも、彼女が、彼女自身に向けた、独り言かも知れない。

その問いに、僕が答えることはできるだろうか。

分からない。

けど、僕はこう答えた。

多分、と。

「ねえ、幸せだって感じるときっていつだと思う？」

「わからないよ。多分、僕にとっては寝るときとかそういうときじゃないかな。だって、そんなの人それぞれだもの」

「そうね。そんなものは人それぞれよね」

「だって人の価値なんて、それぞれじゃないか。だから、価値観の違いが生じるんだよ。そうなる限り、誰も幸せの定義なんてできないよ」

「ええ、偉い人は理屈をこねて、普遍的な幸福を解くようだけど、結局のところ、同じ価値観を持たない限り、そういうのは限りなく自己満足にすぎないわ」

彼女は、何を言いたいのだろう。

僕には、よく分からなかった。

「じゃあ、どうして、わたしたちは幸せだと感じる事ができるの？」

「それはー。うん、幸せとを感じる僕のほかに不幸せだと感じている人がいるかだろうね」

僕は何を言っているのだろうか。僕は一体、何を言いたいのだろうか。

「結局さ、僕たちの幸せなんて、他人と比べてしか感じられないんだよ。ご飯がおいしい。だから幸せ。だって、食べられない人がいるから。それと比べて僕は幸せ。好きな人と手をつなげて幸せ。だって、つなげない人もいるから。そうやって、僕たちは他人と比較して幸せだと感じているにすぎないよ」

「ええーその通りよ。それが多分、幸福の原点だと思うわ」

僕は誰かと比較して、幸せだと感じているのだろうか。

自分でも、その言葉が出てくるほうが驚きだった。

「僕は、幸せなのかな」

そう、そつと呟いた。

分からない。

いやむしろ。

僕は、常に誰かに比較の対象とされて生きているのではないのか。

あいつより、あたまがいい。

あいつより、運動できる。

あいつより、かつこいい。

そうやって、僕はいつも、誰かに比べられて、安心されているのではないかな。

そういうやつを、『普通』だと、言うのではないのだろうか。

僕は、『普通』なんだろう。きっと。

だから、幸せ何かどうか分からない。

これが正直な答えだった。

「じゃあ、『特別』は幸せなことなの―？」

彼女がまた、細く微笑んだ。

今度は、含みなんてなく、純粋な笑顔だった。

それがどうしてか、僕には羨望の眼差しにか見えなかった。

「明日、死ぬの―」

そう、彼女が呟いた。

「それって、どういう意味―？」

「そのままの意味よ。わたしは明日、死ぬの」

「意味がわからないよ。なんで分かるのさ」

「しいて言えば、直感、よ。分かるのよ、ああ、明日死ぬな―
って」

「なんでまたそんな唐突に？」

彼女は、そんな死ぬような病気にかかっている用には今まで見えなかったのに、そういうことを言われると、その肌は、月明かりに映えるほど病的までに青白くて、その四肢はピアノ線のように細かった。

それでも、明日死ぬようには見えない。

「それって、事故に遭うとか、そういうこと？」

「多分、病気の方だと思うけど、それで死ななかつたら、事故でも起きてきつと死ぬわ」

やっぱり、何か持病を持っていたのか。と納得したと同時に、

なぜ、明日死ぬと分かっているこんなにも平然と彼女はしていられるのだろうか。

「ねえー、どうして明日死ぬと分かっている、そんなに平然としてくれるの？」

「受け入れてるからよ」

「怖くないの？」

「うん、なにも怖いことなんてないわ」

「どうして？」

「だって、死ぬだけでしょ？」

どうしてなんだろう。僕は、死ぬことが、怖い。それは誰だっ
て持っているものなのだ。恐怖の原点は『死』への恐れなのに。

どうして、彼女は死ぬことを恐れていないのだろう。

「あなたは、死ぬのが怖いのか？」

「ああ、怖いね」

「死んだこともないじゃない。それでどうして怖いってわかる
の？」

「死んだら、無になるんだよ。何も見えないし」

「じゃあ、あなたは、寝ているとき怖いと思ったことがある？」

「ないよ」

「それと同じよ。きっと、眠るだけ」

「眠ることと死ぬことは違うよ。朝がやってこないんだよ」
どうして。

どうして、僕はこんなにも生を肯定しているのだろうか。
生きることに興味がないと言えばそれは嘘になるだろう。

僕は、自分を『普通』だと決めて、無価値だと烙印を押してい
るのに。

「生きていることはきっと、価値のあることだから、死ぬこと
は、その価値がなくなるから怖いんだよ。自分を全否定される。そ
んな気分じゃないのかな」

「人の死なんて意味ないわ。価値もないわ。誰の死でも平等な

はずよ。だから、わたしが明日死ぬことも無意味なのよ。だから受け入れる。それだけのことよ」

「でも、死には意味ないかもしれないけど生きていることに価値があるんだ。僕らは長く生きるため生きてるわけじゃないよ。どうやって死ぬか。そのためだけに生きている」

「わたしは、どうかしら。わたしの生に意味があるのかしら」

「きつと、意味があるさ」

「わたしは、今まで、病室からでたことなんて一度もなかったわ。ずっと、ベッドの上で寝ていたわ。それに嫌気がさして、わたしは真夜中に病室を抜けだした。それだけよ。わたしの今までなんて。何も価値なんてないわ。だから、生に価値がないなら、死ぬことにさえ意味がないのよ。だから、受け入れるしかないわ」

胸が、締め付けられた。

僕の浅はかな考えなんて、脆く、一度に崩れ去った。

僕は、

同じ毎日を。

繰り返す。

繰り返す。

繰り返す。

それが、当たり前だと思った。

当たり前だから。

価値がないと思った。

それが。

普通だと思っていた。

「あ……あ……」

言葉が出ない。

きつと、目の前に僕の価値を一気に昇華させる少女が居て、それがあまりにも綺麗に見えて。同時にとても、脆く見えて。遠く見えたから。

僕は、少女を見据えた。

自分と、あまりにもかけ離れた存在である彼女を、僕はどうしてか、近く感じてしまう。

こちらに、気付いたのか、少女も薄く微笑んだ。

「僕らは他人同士なのかな」

「ええ、ここで会ったのも何か偶然よ」

「でも、こうして出会った」

「意味なんてないわ」

「そうかな」

「すれ違っただけよ。わたしも、あなたも。誰かと誰かも。そうやって、人は生きているのよ」

「僕はその中で、ちゃんと生きているのかな」

「少なくとも、わたしよりは生きているわ」

きつと、そういうことなのだ。

昨日まで、僕が決めていた『普通』は誰かにとって特別であることもあるのだ。

「君は――誰かを羨ましく思ったことはないの？」

「ないと言えばうそになるわ。でも――わたしはそうやって、誰かの価値となるために生きているようなものだったもの」

ああ――。そういうことか。

今、理解した。

「でも。あなたは違うわ。誰かの価値となるために生きてなんていないわ。むしろ、その逆よ。あなたは、特別なよ。誰かと比べられるわけじゃない。そうやって、誰もがすれ違って、それでも比べあって価値を見出している中に、あなたは『普通』なのよ。なにも価値を見出すことだけが特別じゃないのよ。ただ『普通』に生きていくことが大切なの」

わたしは出来なかったけど。と彼女はつけ足した。

その言葉は、深夜の静寂に響く水滴によって静かに埋もれていく。

額に、冷たさが刺さる。

雨だ。

「あら、降ってきたわ」

傘を持たない、僕と少女は、そうやって終わりを告げる滴によって、別々の道を帰る。

「じゃあ、またね」

っておかしいわ。明日死ぬのにな。

冗談には聞こえない冗談を彼女は笑いながら言った。

その笑顔は、年相応にあって、明日死ぬような彼女から出るものではなかった。

でも、少女は笑う。

出会うはずのない二人。

僕は、きつと『普通』であって。

少女は、きつと『特別』なんだろう。

それは、あまりに極端に位置していて、きつと交わらないものだったのに。

「ねえー」

彼女は、再び問うた。

「あなたは、幸せー？」

その答えは、僕が答えるものであつて。

少女が答えるものだったのだろう。

そうして僕は、この場所をあとにした。

わたしは、その場所で、あなたの後ろ姿を見ている。

その、眼差しは、きつと彼を羨ましい思っているのだろう。きつと届かない。

もしわたしが普通に生きていたら、彼と何処か別の場所では出会っていたかもしれない。

彼を見つめる瞳は、羨望から、深い悲しみを含んでいる。

「わたしは、明日死ぬの」

その眩きは、誰に向けて言つたわけじゃない。

「バカね。何も変わらないわー」

そう、わたしは明日死ぬのだ。

終わりか、始まりかさえわからない死を感じて。

消えてしまった彼を見て。

雨に覆われて、深淵にまた近づく街を見下ろして。

わたしは、初めて彼が羨ましいと感じて。

泣いた。

僕は彼女に後ろを向けて歩きだした。

決して、出会うことがなかった二人が出会ってしまったのはき
っと、何物でもなく偶然だったのだろ　　う。

僕の価値は変わらない。

ここで出会ったのも、意味はないのだろう。

僕は、空を見上げた。

真っ黒な雲に覆われて、額に滴が当たった。

世界は、暗闇に包まれていく。

雨が降る。

僕は何も特別だとは思わなかった。

寂しくも、翳りもなく、僕は来た道を帰っていく。

かすかに、僕は気になって、後ろに振り向いた。

そこに少女はいなく。

ただ、灰色に侵食した世界だけが。

僕の視界に入った。

雨が降った夜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1553w/>

singing in the rain

2011年10月9日14時42分発行